筑波大学 社会貢献プロジェクト

2024−25

筑波大学社会貢献プロジェクト 2024－25

社会貢献プロジェクトとは

社会貢献プロジェクトは、筑波大学と社会との多様な形での連携活動を学内公募し、総合的に支援するもので、平成 16 年度にスタートしました。平成 21 年度からは教員だけでなく学生も申請できるものとなっております。

本プロジェクトは、特定の分野に限定することなく、地域との連携活動を自由に提案することを特徴としており、「科学振興」、「国際」、「文化・地域活性化」、「環境」、「健康・医療・福祉」等、内容は多岐に亘っています。本学ならではの取り組みをぜひご覧ください。

〈筑波大学社会貢献・地域連携 HP〉
https://scpj.tsukuba.ac.jp/

筑波大学社会貢献プロジェクト 2024−25

科学振興

■ 筑波大学発　ーおもしろふしぎ理科実験・工作隊ー…… 4
数理物質系　准教授　小林正美

■ 先端研究を生かした地域社会貢献型理科教育啓発活動…… 5
数理物質系　准教授　後藤博正

■ ロケットエンジンの地上燃焼試験見学及び簡易エンジン製作体験…… 6
理工学群物理学類　林　崇文

■ 地域と共に育てる宇宙技術プロジェクト教室…… 8
システム情報系　准教授　山本亨輔

国　際

■ サッカーボールでつなげる TSUKUBA コミュニティ…… 9
体育スポーツ局　係長　北條英次

■ 家屋修繕プロジェクト…… 9
社会・国際学群社会学類　勝原経太
社会・国際学群国際総合学類　坂岡華

文化・地域活性化

■ つくば多言語・多文化背景を持つ子どもたちの教育支援プロジェクト…… 10
人文社会系　准教授　澤田浩子

■ つなげる外国人家族と地域社会―日本の保育園へようこそ総集編…… 11
人文社会系　准教授　井出里咲子

■ 視覚障害教育の歴史を広める展示会の実施…… 12
附属視覚特別支援学校　教諭　村山彩

■ つくさか 食農体験活動支援プロジェクト …… 13
附属坂戸高等学校　副校長　深澤孝之

■ アートによる子育て支援活動
―夏休みアート・マルシェ 2024 の実施― …… 14
芸術系　助教　吉田奈穂子

■ 地域活性化策とその自立的な運営を支援するロゲイニングの活用とその実践
―大学生と地域の交流から生まれる魅力の発見と発信、賑わいの創出、マップづくりとまち歩きの実施―… 16
芸術系　教授　藤田直子

■ 博学連携による地域文化財の再生と利活用
―土浦市における重要遺跡の調査とパブリック・アーケオロジーの展開―…… 17
人文社会系　教授　滝沢誠

■ YUI プロジェクト …… 18
人間学群障害科学類　戸田優那

■ ラジオでつなぐ、つくばと未来のスターたち…… 19
人間総合科学学術院人間総合科学研究群　古畑翼

■ 第2回 TRS サロンシリーズ …… 20
社会・国際学群国際総合学類　上村来望

■ 文京ラグビースクール活動支援　～小学生へのラグビー普及活動の一環として～…… 21
附属高等学校　教諭　山田研也

環　境

- つくば生き物多様性フェスタの開催…… 22
  生命環境系　教授　上　條　隆　志
- 「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの継続的発展 2024… 23
  生命環境系　助教　丸　尾　文　昭
- 地元に生息する希少種を救え（長野県南牧村）…… 24
  生命環境系技術室（山岳科学センター八ヶ岳演習林）　技術専門職員　井　波　明　宏

健康・医療・福祉

- 『つくばキッズメディカルユニバーシティ 2024』～少年期の子ども対象の医療現場体験ツアー～…… 26
  附属病院　病院講師　五　味　聖　吾
- 不登校児のためのオルタナティブ体育活動事業「ココ／カラ基地プロジェクト 2.0」…… 27
  体育系　准教授　澤　江　幸　則
- 発達障害医療に関する当事者向けパンフレット「発達障害の薬はじめてガイド」…… 28
  人間系　助教　仲　田　真理子
- 障害のある高校生に対する大学進学サポートプログラム…… 30
  ヒューマンエンパワーメント推進局　助教　長　山　慎太郎
- 糖尿病の口腔管理についての情報発信を目的とした教育啓発活動…… 31
  医学医療系　助教　工　藤　理　恵

その他

- 医療的ケア児の災害対策への支援…… 32
  医学医療系　准教授　宮　園　弥　生

※所属、職名は令和６年５月現在のものです。

筑波大学発―おもしろふしぎ理科実験・工作隊―

【活動地域：茨城県、千葉県】

数理物質系　准教授　　小林　正美

1 事業の概要

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

2 事業成果の概要

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中学校生徒を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。さらに、一般の方を対象とする企画（つくば科学フェスティバルなど）も、地方自治体との連携のもと、有意義に行うことが出来た。

3 地方自治体等との連携

＜茨城県＞

つくば市教育委員会、つくばみらい市谷井田コミュニティセンター、大子町教育委員会、龍ヶ崎小学校、伊奈中学校、水戸平成学園高校、筑波大学附属高校、筑波大学附属駒場高校、筑波大学附属駒場中学校

＜千葉県＞

我孫子市教育員会、我孫子市天王台北近隣センター、我孫子市けやきプラザ、我孫子市アビスタ、我孫子高校

4 今後の展望

より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

＜令和６年度 出前講義一覧＞

4/13(土)	コリドイオ(つくばセンタービル)
4/21(日)	科学技術週間
6/15(土)	あびこ市民活動ステーション(けやきプラザ)
6/25(火)	附属高校
7/20(土)	つくばみらい市谷井田コミュニティセンター
7/28(日)	大子町教育委員会
8/ 2(金)	工業会JEAS(高千穂交易:東京)
8/ 3(土)	春日交流センター
8/ 6(火)	キッズランドアフタースクール(つくば市)
8/10(土)	天王台北地区まちづくり協議会(天王台北近隣センター)
8/24(土)	利根町生涯学習センター
8/27(火)	FMつくば
9/ 1(日)	我孫子市生涯学習出前講座(天王台北近隣センター)
9/21(土)	共栄学園高校(前橋市)
9/28(土)	コリドイオ(つくばセンタービル)
10/ 5(土)	けやき祭り(けやきプラザ)
10/20(日)	あびこ子供まつり(アビスタ)
11/ 7(木)	龍ヶ崎小学校
11/ 9(土)	つくば科学フェスティバル(カピオ)
11/30(土)	コリドイオ(つくばセンタービル)
12/11(水)	水戸平成学園高等学校
12/17(火)	附属駒場高校
12/20(金)	伊奈中
1/10(金)	我孫子高校
1/21(火)	FMつくば
2/ 1(土)	布佐南近隣センター
2/21(金)	我孫子市生涯学習出前講座(藤和天王台ハイタウン)
2/23(日)	市民ホールやたべ
3/27(木)	スプリングスクール

先端研究を生かした地域社会貢献型理科教育啓発活動

【活動地域：茨城県つくば市】

数理物質系　准教授　　後藤　博正

1 事業の概要

ラジオ工作、タマムシ液晶の製作、夜光ゲルの作成、静電気センサーの作成などの理科体験実験とデモンストレーションを通し、茨城県内の小中高生への理科系啓発活動を行う。

2 事業成果の概要

筑波大学科学技術週間 2024 において、タマムシ液晶と夜光ゲル、ムシメガネのような偏光板、静電気センサーコイル型鉛筆立ての作成を来場者の子供たちに一人ひとりに実演・指導した。つくば科学フェスティバルでは、エレクトロニクスと電子音楽の世界のテーマでテルミン実演やサンプリング音の体験、サーモグラフィーの体験を行った。つくば理科学シンポジウムではお弁当パックに組んだトランジスターラジオの体験製作を行った。夏には茨城県教育庁学校教育部の高校生未来の科学プロジェクトのイベントにおいてラジオ製作教室を開催した。さらに 2025. 3.28 ～ 29 につくば国際会議場で行われたサイエンスエッジ 2025 でワークショップを行った。特にオリハルコン液晶と称した金色液晶の体験製作が好評であった。また本学 G-FEST や SKIP に協力した。

図１．サイエンスエッジ2025

図２．つくば科学フェスティバルとつくば理科学シンポジウム

3 地方自治体等との連携

茨城県立土浦第一高等学校、茨城県教育庁学校教育部、つくば市教育局との連携を行った。

4 今後の展望

つくばエキスポセンター、茨城県内各高校、つくば市内の中学校、茨城県教育庁学校教育部、つくば市教育局とこれからも連携を深め活動を行っていきたい。新しい教材やプログラムの開発を工夫して行っていきたい。

図３．科学技術週間

ロケットエンジンの地上燃焼試験見学及び簡易エンジン製作体験

【活動地域：茨城県つくば市】

理工学群物理学類　林　崇文

1 事業の概要

本プロジェクトでは、筑波大学宇宙技術プロジェクト（STEP）の学生が主体となり、つくば市内の高校生を中心とした中高生向けイベントを開催した。10月20日のイベントには８名の中高生が参加し、虹の広場で団体所有のハイブリッドエンジン地上燃焼試験を見学した。ガスリーク試験や最終安全確認の段階から点火シーケンスまで、現役生とOBが解説し、質問に対応した（図１）。

燃焼試験では50気圧を超える高圧ガスを取り扱うため、顧問教員の立会いの下、ヘルメット着用などの安全対策を徹底した。試験は、酸化剤充填時にエンジンでガス漏れが確認されたため、制御脱圧を行い、不点火となった（図２）。

また、小型エンジンの製作体験や運用を計画していたが、以下の安全上の理由から実施を見送った。

・酸化剤タンクと固体燃料の接続部分でガス（O_2）漏れの可能性（Oring取り付けにより対処可能）
・燃焼台の転倒防止の必要性（現在は解決済み）
・点火装置に電圧がかかり続けることで故障の可能性が判明（対応中）

これらの理由により、今年度に予算で購入した物品は、次年度以降の実施に向けた試作品の作成に活用した。

2 事業成果の概要

今回のイベントを通じて、参加した中高生の多くが宇宙工学に興味があるものの、具体的な学習方法や進路について明確なイメージを持っていないことが分かった。そこで、実際のエンジン運用、安全管理方法について詳細に学んでもらうため、ガスリーク試験や最終安全確認など、すべてのシーケンスをSTEPのメンバーと同じ目線で見学できるよう工夫した。これまで、高圧ガスを扱う際は保安区域内での見学に限定していたため、このイベントでは特に緊張感を味わってもらうことができた。これにより、本プロジェクトでは、体験型のイベントは実施できなかったものの、参加者がエンジン運用の実際の流れや安全管理の重要性を実感し、工学への具体的な進路を考えるきっかけとなったのではないかと思う。

また、STEPの学生は、見学範囲の拡大に伴うリスクを最小限に抑えるため、安全管理に特に重点を置いてイベントを実施した。今後、体験型イベントの実施する上での安全管理に活きる貴重な経験となった。さらに、中高生に説明を行う過程で知識を整理し、自らの理解を深める機会にもなった。

3 地方自治体等との連携

本プロジェクトの参加者は、主に市内の中学生・高校生であったが、想定より参加人数が少なく、十分に周知できていなかった可能性があると考えている。今後はポスター掲示などの広報対象地域をさらに広げ、SNSでの広報についても強化したいと考えている。

4 今後の展望

本プロジェクトでは、小型エンジンの製作体験実施の見送りや燃焼試験でのエンジントラブルなどにより予定していた成果を十分に示すことができなかった。しかし、実際に中高生と交流したことにより、工学においてもアクティブラーニングが重要であることを再確認することができた。今回予定していた小型エンジンの制作、打ち上げ体験の安全管理に改善を加え、「体験できる工学」をより多くの中高生に提供することを目指す。

5 その他

本プロジェクトは、筑波大学からの資金支援により実施され、つくば市の中高生が学校教育では体験することのできない実践的な工学に触れる機会を提供することができた。ご支援くださった社会貢献プロジェクト関係者の皆様、選考および事務手続きを担当された皆様に、深く御礼申し上げる。

図１　OB が最終安全確認の手順を説明している様子。（黄色ヘルメットが中高生）

図２　保安区域内から点火シーケンスを見学している様子（酸化剤制御脱圧中）

地域と共に育てる宇宙技術プロジェクト教室

【活動地域：茨城県つくば市】

システム情報系　准教授　　山本　亨輔

1 事業の概要

『地域と共に育てる宇宙技術プロジェクト教室』は、筑波大学が地域の子どもたちと共に宇宙技術を探求し、未来の科学者や技術者を育成する教育プログラムである。この取り組みでは、大学の専門知識と資源を活用し、実践的な学びを提供している。参加する子どもたちは、実際にロケット競技会で活躍する第一線の本学学生たちと共に、宇宙技術の基礎から応用までを学び、創造性と問題解決能力を養うことができる。長期的には、学生と地域住民の間の交流を通じて、つくば地域の宇宙技術文化を発展させ、科学教育の新たな可能性を開くことを目指す。

2 事業成果の概要

今回は、本事業の初年度として、つくば市内近隣の中学・高校を中心に参加者を募集し、宇宙教室を開催した。また、本学からは本学公認サークル STEP（Tsukuba Space TEchnology Project：つくば宇宙技術プロジェクト）のメンバーが参加し、演習を担当した。

第１回（2024年07月20日）

CAD ソフトのインストールと使い方を STEP 衛星班メンバーが説明した。初心者が躓きがちな最初のステップを一緒に行い、今後の学習に役立ててもらおうという趣旨である。

第２回（2024年08月30日）

CanSAT（ロケット打ち上げ競技において人工衛星を模擬した小型ローバー）のタイヤ設計について、STEP メンバーが参加者に説明し、一緒に作成を手伝った。CanSAT の性能は、タイヤの設計に大きく影響を受ける。紹介された STEP 独自設計の軽量・強靭なタイヤは形状も複雑でまねることは難しいが、参考にしつつ、各班が工夫して設計に取り組んだ。

第３回（2024年09月28日）

小型の CanSAT を製作して動作試験を行った。

第４回（2024年10月20日）

STEP メンバーが、2024年９月に米国ネバダ砂漠で行った打ち上げ競技会での CanSAT の成績について、英語でプレゼンを行った。

次に参加者が設計したタイヤを3D プリンティングして、各班自作の CanSAT を組み立て、筑波大学構内の建物からパラシュート降下試験を行った。高い建物から安全に投下し、着地後に CanSAT がパラシュートを切り離し、動作することを確認した。

第５回（2024年12月01日）

参加者が成果プレゼン発表を行った。

3 地方自治体等との連携

つくば市広報局のイベント情報掲示板にて、本事業の周知活動を行った。

サッカーボールでつなげるTSUKUBAコミュニティ

【活動地域：茨城県つくば市】

体育スポーツ局　係長　　北條　英次

1 事業の概要

近年、つくば市及び近隣の市町村では、外国人住民は急速に増えています。しかし、彼らが地域コミュニティに溶け込めず、社会的に孤立するという社会課題が生じています。そこで、外国人住民と日本人の子どもたちが一緒にサッカーを体験し、子ども同士の交流を深めるだけではなく、保護者間のコミュニティ形成を促進するイベントを企画しました。本イベントでは、子どもたちが同じフィールドでプレーすることで自然に交流し、互いを理解し合うきっかけを提供しました。また、保護者同士も会話を交わし、異なる背景を持つ家庭同士がつながる機会となりました。

2 事業成果の概要

令和７年３月15日(土)、筑波大学セキショウフィールドにて、小学生を対象としたサッカー体験イベントを開催しました。本イベントは、関彰商事サッカー部セキショウFC監督の内藤清志氏の協力を得て実施され、つくば市内の子どもたちに加え、常総市のブラジル人コミュニティからの参加も含め、計17名が集まりました。

当日は小雨が降るあいにくの天気でしたが、子どもたちは２時間にわたり思う存分サッカーを楽しみました。練習やゲームを通じて、互いに協力し合いながらプレーし、自然と交流が生まれました。また、保護者同士も会話を交わし、地域を超えたつながりが育まれる貴重な機会となりました。

今後も、国籍や背景を問わず、すべての人たちが気軽にスポーツを楽しめる場を提供し、地域の交流を深める活動を続けていきます。

家屋修繕プロジェクト

【活動地域：インド 西ベンガル州　ビシュナプールコロニー】

社会・国際学群社会学類（インドワークキャンプ団体 namaste! 代表）　勝原　経太
社会・国際学群国際総合学類　坂岡　華

1 事業の概要

家屋修繕プロジェクトは、生活の基盤となる居住環境が整っていない家屋を対象に、建て替えを行うプロジェクトである。状態のひどい家屋の中には、家の骨格が崩れて住めなくなっているものや、屋根に穴が開いて雨漏りが発生しているものなどがある。コロニーの人々との協議や視察を通じて、最も緊急性の高い５軒の建て替えを行うことに決定し、クラウドファンディングで集めた資金や学園祭でのインド雑貨の販売利益を活用して、最初の１軒の建て替えを実施した。来年の春の渡航の際には、４軒の家屋の建て替えを実施し、このプロジェクトを完了することが目標である。

2 事業成果の概要

現在、一軒の住宅が建設中である。今後も生活の基盤となる家屋の修繕を進め、住みやすい環境を整えることで、村人の健康的な生活を支えていく。しかし、単に住環境を改善するだけでなく、村人が主体的に関われるイベントとして実施し、被差別意識の解消を大きな目的としている。ハンセン病コロニー以外の人々との交流を促し、相互理解を深めることで偏見をなくすことを目指し、今後も活動を続けていく予定である。

文化・地域活性化

つくば多言語・多文化背景を持つ子どもたちの教育支援プロジェクト

【活動地域：茨城県つくば市】

人文社会系　准教授　　澤田　浩子

1 事業の概要

近年急増しつつある、外国にルーツのある子どもたちをめぐる教育課題について、大学の教育リソースを活かし、小中学校、高等学校等の教育現場や、地域・自治体と連携しながら、ともに課題を解決していく体制づくりを目指す。

2 事業成果の概要

2024年度は茨城県内の16市町村、26の小中学校・高等学校に、大学生による日本語サポーターを派遣し、対面またはオンラインで日本語学習支援活動を実施した。6月、11月にはそれぞれ1週間、茨城県立石下紫峰高等学校で放課後勉強会を開催、また、8月には結城第一高等学校で6日間のサマースクールを実施した。また、例年継続して開催しているワンデイキャンプは、今年は11月16日にミュージアムパーク茨城県自然博物館で実施し、茨城県全域から中学生19名、大学生16名が参加した。このほか、支援活動を行っている県内の学校を学生らと共に定期的に訪問し、学校教員との懇談会を行うなどして、地域の教育課題の把握や解決に向けた話し合いを行った。

3 地方自治体等との連携

上記の活動は、茨城県教育委員会、各市町村教育委員会、小中高等学校、各市町村の国際交流協会等との連携により実施している。

4 今後の展望

今後も自治体や学校、民間団体との連携の中で、学生による主体的な活動を促進することで、外国ルーツの子どもたちの教育課題について、将来にわたって自治体や行政と協力しながら地域社会を支えていくことのできる人材育成に貢献していきたいと考えている。

高校での放課後勉強会
（2024年6月10～14日　茨城県立石下紫峰高等学校）

高校でのサマースクール
（2024年8月7～23日　茨城県立結城第一高等学校）

ワンデイキャンプ
（2024年11月16日　茨城県自然博物館）

学校訪問・懇談会
（2024年12月4日　筑西市立下館中学校館）

つなげる外国人家族と地域社会
―日本の保育園へようこそ総集編

【活動地域：茨城県つくば市】

人文社会系　教授　　井出　里咲子

1 事業の概要

本事業はつくば市にて生活する外国籍の家族について、地域社会の入口のひとつである保育園（幼稚園、私立公立保育園・保育所を含む）での日本語によるコミュニケーションと相互理解を促進する、かかわり合いの仕掛けづくりを目指すものである。筑波大学人文社会系の大学院生および国際総合学類の学類生を母体としたプロジェクトチームとともに活動を行った。

2 事業成果の概要

今年度の主たる活動として以下の二つを実施した。第一に、外国籍の児童が多く在籍する市内保育園の保護者懇談会での「つなげる通訳活動」である。昨今市内では外国籍滞在者の増加を受け、半数の園児が外国籍のところもあるが、2024年の４月と10月に計３回の保護者懇談会に参加し、園側の説明する児童の様子や園の決まり事、保護者の要望や感想について、保護者とスタッフの間に入り、日本語から英語、英語から日本語等に通訳した。また児童や保護者と一緒に、園庭でのアクティビティに参加した（写真１参照）。

（写真１）保育園の園庭にて挨拶する筑波大生たち

第二に、「つなげるプロジェクト2025春のワークショップ」と名付けられたイベントを JICA アフガニスタン事務所の後援を得て、３月９日（日）に筑波大学構内で実施した。つくば市内在住の16歳から21歳のアフガニスタン人女性４名と筑波大学類生や卒業生を含めたプロジェクトメンバー４名、スタッフを合わせた11名で、保育園で利用できる子育てコミュニケーションツールをアフガニスタンの言葉（ダリ語を中心に）に翻訳した。ラマダン期間中だったため、活動後は参加者手作りのイフタールが振舞われた。

修了証書

Completion Certificate

貴殿は筑波大学で実施された「つなげるプロジェクト2025春のワークショップ：子育てコミュニケーションツールのアフガニスタンの言葉への翻訳と文化理解」に参加し、筑波大学の学生等とともにツール翻訳と文化説明に従事しました。上記を称えここに修了証書を授与します。

This is to certify that you have participated in the "Tsunageru Project 2025 Spring Workshop: Translation of Parenting Communication Tools into Afghan Languages and Cultural Understanding" held at the University of Tsukuba and engaged in tool translation and cultural explanation in collaboration with the students at the university. In recognition of your contributions, we hereby award you this certificate of completion.

２０２５年３月

筑波大学　井出里咲子研究室

Risako Ide, Ph.D. University of Tsukuba

（図１）イベント参加者へ手渡された修了証書

3 地方自治体等との連携

今年度の事業では近年ご縁をいただいている JICA 事務所と連携してプロジェクトが実施できた。また二つの活動ともに、互いのニーズを確認して実施をし、参加する筑波大生にとっても、地域社会を知り、同じ世代の若者と交流を深める意義深い機会となった。

4 今後の展望

2021年から４年に渡り社会貢献事業のご支援いただいき、つくば市役所や国際交流協会、また筑波大学内でたくさんの人々と出会い、交流の機会をいただけた。本年度で活動に一つの区切りを設けるが、今後はさらに地域社会のニーズを新しく見極め、再び実りある活動をしたいと考えている。

視覚障害教育の歴史を広める展示会の実施

【活動地域：東京都文京区目白台地域】

附属視覚特別支援学校　教諭　　村山　　彩

1 事業の概要

本事業は、明治期の日本語点字翻案の確立をはじめとして、日本の盲教育を支えてきた筑波大学附属視覚特別支援学校の歴史を紐解く展示会や点字学習会を開催することで、開かれた学校づくりと共生社会に向けた取り組みを促進するというものである。

本校資料室が所蔵する、日本点字制定以前の文字資料（凸文字など）や、点字制定にまつわる資料（外国製の点字盤など）を中心に発信を行った。

展示会は令和６年８月23日に校内で、11月30日には文京区目白台交流館で実施し、12月３日～翌年１月７日には、文京区目白台図書館でパネル６枚も展示した。点字体験教室は７月27日に目白台図書館において実施した。

2 事業成果の概要

本校資料室の見学と音楽科卒業生のミニコンサートをメインとする８月23日の展示会に、町内の方を中心に約10名が参加した。11月30日の展示会では、資料・パネルの展示とあわせて本校高等部生徒３名のプレゼンテーション、音楽科卒業生と町内の方のミニコンサートを企画し、約30名が参加した。７月27日の点字体験教室への参加者約15名には、本校の点字に関する歴史や点字の簡単な表記法を知ってもらい、身近な人へ点字でメッセージを書いてもらった。

参加者からは、視覚障害教育やその歴史への関心が高まったという声が寄せられた。音楽科卒業生による箏・声楽・ホルンの演奏で、視覚障害者の可能性も社会に広めることができた。また、生徒自身が自分の思いを社会に発信することで、社会における自らの役割を考えるきっかけにもなった。さらに、文京区教育委員会の方も来場され、資料の将来性について考えていただく機会にもなった。筑波大学理療科教員養成施設やお茶の水大学学生のボランティア協力を受け、学内外の連携も深めることができた。

以下に参加者の感想の一部を紹介する。

・高等部の生徒の方々の発表は、大変丁寧に詳しく調べられたようで私は感銘を受けました。目の見えない・見えにくい人に出会ったときに、どのように接したらよいのかということも理解することができました（11月30日の参加者）

↑生徒のプレゼンテーション動画を鑑賞

3 地方自治体等との連携

文京区目白台雑司ヶ谷町会や目白台交流館と連携し、展示会の広報活動や展示会場の準備を協働で行った。11月30日の展示会では、町内の方によるフルートや声楽の演奏企画も実現した。音楽を通じた地域の文化的活性化にもつながり、地域に開かれた学校づくりをさらに進める成果となった。

↑パネルと資料展示の様子

4 今後の展望

次年度以降もブラッシュアップした取り組みを続け、2026年に150年を迎える筑波大学附属視覚特別支援学校の歴史を広く社会に発信していきたい。

つくさか 食農体験活動支援プロジェクト

【活動地域：埼玉県坂戸市と近隣市町】

附属坂戸高校　副校長　　深澤　孝之

1 事業の概要

本プロジェクトは、坂戸市と近隣の小中学校などを対象に、農業や食に関する体験活動の支援を行っている。なかでも特別な支援を必要とする子どもたちを対象とした活動を重視し、本校生徒との協働学習を通じて、より効果的な機会の創出に努めている。

2 事業成果の概要

令和６年度も内外で多くの活動機会を得ることができた。学校教育現場での食育活動が定着し、小中学校より菜園活動への支援要請が多く寄せられた。計画立案から資材の提供、管理への指導助言まで可能な限り応じて、充実した成果を共有することができた。

小学校菜園への出前授業［夏野菜の定植］

秋以降の活動では、恒例となった市内中学特別支援学級との協働学習が実施された。当年度は小学生を交えた収穫体験学習も行い、よりインクルーシブな交流機会を得ることができた。多相な交流空間のなかで、参加者の成長や変化を垣間見ることができた。

特別支援小中学生との協働学習［収穫作業］

学校給食への支援では教職員と調理員によるトウモロコシ収穫体験を実施した。早朝からの収穫の後、特別支援学級による調理前調整体験をへて提供された。

教職員の給食食材収穫体験［トウモロコシ］

秋以降の給食食材提供では、野菜価格の高騰により例年以上の依頼を受けた。学校給食現場ではキャベツやブロッコリーなどの使用を中止し、モヤシなどへの置換が進んでいた。幸い本校では作柄の悪化は無かったため、市内各校に向けて可能な範囲で広く提供することができた。公共の食の需給確保が、小規模な社会貢献で支え得る貴重で複雑な機会となった。

給食食材の出荷［キャベツ・ブロッコリー］

3 地方自治体等との連携

坂戸市学校教育課、教育委員会と連携を図りながらプロジェクトを進めている。当年度は下水道組合より畑作向けに堆肥の提供を受け、以降も連携を続けることとなった。

アートによる子育て支援活動
―夏休みアート・マルシェ 2024 の実施―

【活動地域：茨城県つくば市、全国】

芸術系　助教　　吉田　奈穂子

1 事業の概要

本事業は、多様で専門的なアート活動を幼児から大人までの参加者へ提供することにより、参加者の自由な発想力や創造性を伸ばし、豊かな感性を育む機会を創出することを目的とする。また、親子が安心して過ごせる場を提供することで、つくば市の喫緊の課題である子育て支援の実現に貢献しうる、アートを通じた社会貢献活動である。

2 事業成果の概要

2024年８月４-５日に「夏休みアート・マルシェ2024」を筑波大学体育芸術エリアで開催した。今年度も新しいアート活動を加え、以下のワークショップを行った。「アート・デイキャンプ(静物・人物)」：モチーフやモデルを観察して描く絵画制作（担当：守屋亜矢子)、「アートメダル」：石膏でオリジナルのメダルを制作（担当：宮坂慎司)、「コッパ彫刻」：木片を使った立体制作（担当：川島史也)、「リボーンアートボール」：古くなったボールに絵を描く絵画制作（担当：太田圭)、「ほうきをつくろう」：つくば式ほうきの制作（担当：宮原克人)、「アートたんけん隊」：大学内を見学したり学生作品を鑑賞したりするツアー(担当：吉田奈穂子)

ポスター（デザイン：則座初音）

参加者アンケートからは以下のような感想が寄せられた。「せかいで１ばんたのしかったです。ありがとうございます。（１年)」「アドバイスをしてもらえたのでふだんかくときよりもよくかけたと思います。(６年)」「小さい子向けだと思っていましたが、大人もとても楽しめました！新しいことにチャレンジするのが苦手な息子でしたが、何をやっても良いという雰囲気にとてもリラックスしていました。（未就学児保護者)」。老若男女多くの参加者に満足してもらうことができた。

その後、全国から送付される「おうちでアート・デイキャンプ」の作品も加えて作品の審査を行った後、８月24日－９月１日までつくば美術館において子どもたちと講師の作品を展示した。延べ2000人が来場し、連日多くの家族連れで賑わった。

展示の様子

3 地方自治体等との連携

本プロジェクトは、（公財)つくば文化振興財団とつくば市の協力体制の下で実施した。つくば市文化芸術推進基本計画の活動としても施策されている。作品展の初日に行われた表彰式には審査員や受賞者に加え、五十嵐立青氏（つくば市長）も参加し受賞者を称えた。加えて、今年度は共英製鋼株式会社、ターナー色彩株式会社の後援の下で実施した。

4 今後の展望

前年度と同様に、応募開始から数日で定員に達した。はじめて参加される方も、毎年応募してくださっているリピーターの方も多いイベントである。この活動に参加した児童生徒が将来、本学を受験するきっかけになっている一面もあるため、地域と大学をつなぐ社会貢献活動として今後も活動を継続したい。

アート・デイキャンプ（静物）

アート・デイキャンプ（人物）ウクライナ留学生をモデルに

アート・デイキャンプ（静物）

コッパ彫刻

ほうきをつくろう

リボーンアートボール

アートたんけん隊

【展示会場】 【Movie】

地域活性化策とその自立的な運営を支援するロゲイニングの活用とその実践
―大学生と地域の交流から生まれる魅力の発見と発信、賑わいの創出、マップづくりとまち歩きの実施―

【活動地域：茨城県つくば市】

芸術系　教授　　藤田　直子

1 事業の概要

日本各地で地域コミュニティの衰退とその振興策が模索されている中、数年に渡りつくば市周辺地域（北条・小田・大曽根・吉沼・上郷・栄・谷田部・高見原、以下 R8 地域）の活性化を地域とともに実施してきた。住民らと共にロゲイニングを通じた「魅力の発見・発信」「イベント」「賑わい」「交流拠点」「まち歩き･マップ」を実現し、交流人口の増加や定住人口の増加への貢献を目指した社会貢献活動を実施した。

2 事業成果の概要

ロゲイニングとは、地図を持って地域全体に設置されたチェックポイントを制限時間内にまわるオリエンテーリングに似た屋外活動で、現代版の宝探しと言い換えることもできる。2019年度から実施している本活動はコロナ禍を乗り越え、地域とのつながりも強くなり、満足できる実施を実現することができた。具体的には大曽根地域にて『大曽根筑穂花畑マルシェと R8ロゲイニング』、上郷地域にて『R8ロゲイニング at 上郷フェスティバル』、谷田部地域にて『谷田部オータムフェアと R8ロゲイニング』を実施した。加えて､中心市街地にて初めての実施を行うことができ、『R8ロゲイニング in まつりつくば』を開催することができたことは本年度の成果として大きな意義をもっている。

この社会貢献活動は全て地域の活性化協議会やつくば市との共同実施にて行い、各地域の方々と我々筑波大学側が企画の検討から準備や実施に至るまで継続的に交流して互いを理解しあいながら進めたものである。

また、前年度までの実績をもとに R8ロゲイニングのマニュアル作成とパッケージ化を進め、それを企画と運営に導入することができた。

3 地方自治体等との連携

本プロジェクトは、つくば市都市計画部市街地振興課周辺市街地振興課、大曽根・花畑・筑穂地域活性化協議会、上郷市街地活性化協議会、谷田部市街地活性化協議会､つくば市スポーツ協会と連携して実施した。つくば市が目指す「地域が自走するまちづくり」と本プロジェクトの想定は合致しており、連携は多方面に広がっている。

4 今後の展望

周辺市街地と中心市街地との交流人口の増加を目指し、中心市街地や近年開発された居住エリアの連携を強める。つくば市は人口増加しており新住民も増えている。その人達へロゲイニングの体験を通じて周辺市街地の認知度を高め、交流人口を促進することで周辺市街地活性化に寄与していきたいと考えている。

5 その他

本プロジェクトのウェブサイトにて活動の詳細を紹介している。

また、本プロジェクトから発展した『地域活性化のデザイン』を公開している。

博学連携による地域文化財の再生と利活用
―土浦市における重要遺跡の調査とパブリック・アーケオロジーの展開―

【活動地域：茨城県土浦市】

人文社会系　教授　　滝沢　誠

1 事業の概要

地域の文化財は地域固有の歴史や文化を理解する上でかけがえのない存在である。近年では文化財の一層の活用が求められ、文化財の観光利用に向けた動きも進んでいるが、観光利用は活用の一側面にすぎず、とくに地域の文化財は身近な歴史や文化を学ぶ場としての重要な存在意義がある。こうした問題意識にもとづき、本プロジェクトでは土浦市教育委員会と連携しながら市内の重要遺跡を調査し、その成果を市民に還元するための活動を推進した。

2 事業成果の概要

事業の目的に沿って、①市指定史跡・常名天神山古墳（前方後円墳・約70ｍ）の発掘調査、②市民向け現地説明会、③パンフレットの作成を行った。

常名天神山古墳の発掘調査は、人文学類の考古学実習を兼ねて実施し、同古墳の墳丘形態や規模、年代を把握する上での重要な成果を得ることができた（茨城新聞2024年12月20日朝刊に関連記事）。とくに、数多く出土した壺形埴輪は、当地域の古墳時代史を解明する上での貴重な資料を提供するものとなった【写真１】。そうした成果を市民にわかり易く伝えるため、発掘調査中の12月21日に現地説明会を開催した【写真２】。この説明会には、市内外から幅広い年齢層にわたる約70名の参加者があった。当日、参加者からは数多くの質問が寄せられ、地域の文化財（古墳）に対する関心の高さがうかがえた。

3 地方自治体等との連携

本プロジェクトに関連して、土浦市教育委員会では「筑波大学合同学術調査事業」として予算措置を講じている。発掘調査に必要な経費は主に土浦市予算から支出し、社会貢献活動にかかわる経費は本プロジェクト予算から支出するというかたちをとり、それぞれの目的に沿った効果的な予算執行を実現している。

4 今後の展望

本プロジェクトは土浦市当局において高く評価されているばかりでなく、その成果に対する市民からの関心も高い。本プロジェクトでは次年度も土浦市との合同学術調査事業を継続し、引きつづき市内の重要遺跡について調査を進めるとともに、その成果にもとづく市民向け説明会を開催する予定である。また、オンライン配信による現地説明会や解説動画の作成、大学内展示施設（人文社会系学術展示室）でのミニ展示なども計画している。

写真１　常名天神山古墳の発掘調査を行う筑波大生
調査区からは多数の壺形埴輪片（中央部）が出土した。

写真２　発掘調査の現地説明会
筑波大生（左）の説明に聞き入る参加者。

YUI プロジェクト

【活動地域：茨城県つくば市】

人間学群障害科学類　戸田　優那

1 事業の概要

本プロジェクトは、病院を舞台に、病児（何らかの理由で病院で過ごす子ども）を対象に、自分の能力や仲間、未来とのつながりを感じる機会をつくることを目的とした。その前段階として、舞台を地域のクリニックに、対象を地域の子どもたちに変更して実施することにした。この取り組みを通して子どもたちが地域の病院を今よりも身近な場所として捉えてくれることを期待している。

2 事業成果の概要

〈実施内容〉

日時：2024年10月22日(火)10時半～12時

場所：つくば公園前ファミリークリニック

スタッフ：筑波大学生５名（人間学群、障害科学P、体育学P、BPGI)、他大学生１名

対象者：地域の年長６名

内容：院内なぞときシールラリー

(クリニック内のチェックポイントを見つけてなぞときやアクティビティに取り組み、シールをもらう)

活動ポスターと問題の例

〈事業成果〉

①子どもたちに病院を身近に感じてもらう。

子どもたちが活動実施中に病院に対して恐怖心を抱いている様子は見られなかった。病院に通院以外の目的で来る機会はほとんどないと思ったため、実際の病院で楽しいイベントを実施することは、病院を身近に感じてもらうことにつながったと考える。

②シールラリーの進め方について学ぶ。

本プロジェクトは今後も対象を変えて続けていく予定であるため、スタッフが進め方について学ぶことができたことは大きな成果である。

3 地方自治体等との連携

今回、地域にある病院との連携を図った。病院との話し合いを通して、地域医療について学び、病院が地域のなかで治療だけでなく付加された特性として、二次予防と一次予防を行っていることを理解できた。そこに私たちの活動の意義があると感じた。

4 今後の展望

来年度、YUI プロジェクトは重症心身障害児・医療的ケア児を対象に余暇の充実を目標に活動していく予定である。今回実施して得た反省点を活かし、問題内容や活動の進め方について検討し、活動に制約のある子どもたちが楽しむことのできる活動になるように、活動メンバーと意見交換を行い、活動を実施していきたいと考えている。

子どもたちがなぞときに取り組む様子

ラジオでつなぐ、つくばと未来のスターたち

【活動地域：茨城県つくば市】

人間総合科学学術院人間総合科学学術群　古畑　翼

1 事業の概要

報告者らは、つくば市のコミュニティ放送「ラヂオつくば」で番組制作を行っている。本番組は、何かに挑戦している／しようと思っている方をゲストに招き、挑戦に踏み出す際の葛藤を聞き出すことで、挑戦したいことを心の奥底に抱えながら、一歩踏み出すことを躊躇している人たちの背中を押したいという思いで制作してきた。本プロジェクトは、ラジオ番組を通じ、学生を中心とした若年層と地域のつながりを深め、地域活性化や有事のプラットフォームとしての活用が求められるコミュニティ放送の知名度向上に貢献することを目的としている。

2 事業成果の概要

本プロジェクトの採択を原資に、毎週１回30分間の番組をつくば市のコミュニティ放送「ラヂオつくば」にて放送した。プロジェクト期間内に、計51回の番組を放送し、学内関係者・地域住民など延べ41名にゲストとして出演いただいた（内訳は末尾の表のとおり）。

以下、ゲスト出演者について簡潔に紹介する。本学関係者の場合は研究や課外活動などに熱中して取り組んでいる方々の活動紹介、悩みや葛藤を話していただいたり、筑波大学に進学した理由や受験生の頃の思い出を話していただいたりと、これから何かに打ち込もうとしている、あるいは打ち込んでいるものがある学生や、大学受験を控えた高校生を勇気づけることを意図した番組構成をとった。学外者については、主につくば市内で祭りの運営やコミュニティスペースの運営などの活動をしている方々に出演いただき、これからより知名度を上げていくことを目指した草の根の市民活動について紹介した。国際都市つくばならではの「国際結婚」をトピックとして制作した回もあった。さらに、オンライン形式の収録を活用し、全国のラジオ番組やポッドキャスト番組を自主制作している方々へのインタビューを行った。インタビューでは、出演者が一般（非営利）の立場でラジオ番組を始めようと思うに至った動機や、番組制作を通じて気づいたこと、悩んでいることを尋ねた。この一連のインタビューは、ラジオ番組を制作することの楽しさを伝え、今後番組を制作することに興味のある方々の参考になればと考えている。

番組制作以外の「ラヂオつくば」を通じた地域との関わりについては、「３．地方自治体等との連携」にて詳しく述べる。

ゲスト出演者の属性	人数（延べ）
筑波大学関係者（学生）	10名
筑波大学関係者（上記以外）	1名
学外者（地域住民等）	30名

2024年４月～2025年３月までのゲスト出演者（番組関係者を除く）内訳

3 地方自治体等との連携

「ラヂオつくば」では、平日の昼と夕方に生放送が編成されており、日替わりのパーソナリティの方が地域の活動について紹介している。私たちの番組もこれまで複数回生放送で紹介していただくなど、良好な関係を築くことができた。

「ラヂオつくば」生放送番組のパーソナリティの方が中心となり、2024年10月13日に開局16周年を記念した音楽イベントである「ラヂフェス2024」が開催されたが、私たちの番組もこのイベントのPRに参加するとともに、「ラヂフェス2024」前日に「前夜祭」と題する交流イベントをつくば駅前のコミュニティスペースである「co-en」にて開催した。交流イベントでは、ラヂオつくばのパーソナリティや私たちの番組に過去出演いただいた学生、地域の方々との情報交換や歓談を行った。

第２回 TRS サロンシリーズ

【活動地域：茨城県つくば市】

社会・国際学群国際総合学類　上村　来望

1 事業の概要

筑波大学の有志学生からなるつくばリサイタルシリーズ実行委員会は、学生や市民が音楽芸術に気軽に触れ、観客と演奏家、実行委員が感動を通じて絆を深めることを目的とし、一流のアーティストをつくばに招いて行う演奏会の立案・企画・広報・運営を行っている。つくばなどの地方都市ではプロの演奏を聞く機会が少なく、盛んに演奏会が行われている都内へ行くと、交通費や入場料が高額になる。当委員会の演奏会では、学生無料、一般1500円で、クラシックになじみのない人々でも興味を持ち、一流に触れる機会を提供している。

2 事業成果の概要

2024年６月９日（日）に、つくばアルスホールにて、第２回 TRS サロンシリーズ「荒木奏美―染みわたるオーボエの調べ―」を開催した。TRS サロンシリーズとは、カピオホールで開催される通常のつくばリサイタルシリーズとは異なり、「小規模で贅沢、フレキシブルでユニーク」をコンセプトとしたコンサート企画である。

読売日本交響楽団首席オーボエ奏者で茨城県出身の荒木奏美氏とピアニストの大崎由貴氏を迎えた本公演には、会場のキャパシティいっぱいの申込があり、当日は約80名が来場した。小規模な会場ならではの親しみやすい雰囲気の中で、演奏者と来場者の距離が近く、荒木氏と大崎氏の温かい人柄も相まって、終始朗らかな演奏会となった。また、演奏者との交流の機会も盛んに行われ、観客が音楽をより身近に感じられる場となったことも、本公演の大きな成果の一つである。

公演後のアンケートでは、約９割の観客が「満足」と回答した。「演奏者と直接交流できたことが良かった」「演奏を間近で楽しむことができ、特別な体験だった」といった感想が多く寄せられ、クラシック音楽の魅力を伝えるという本事業の目的が達成されたことがわかる。

3 地方自治体等との連携

本公演は、筑波大学人文・文化学群比較文化学類との共催で実施した。また、筑波大世界を変えよう基金の協賛を受けるとともに、茗渓会、つくば市教育委員会、つくば市、TRS 実行委員会同窓会の後援を得て開催した。

4 今後の展望

今後の展望として、引き続きクラシック音楽の魅力を多くの人々に届けることを目指し、より幅広い層の観客を迎えられるような企画を検討していく。また、サロンシリーズならではの魅力を活かし、演奏者と観客の距離が近いアットホームな雰囲気を大切にしながら、交流をさらに深める工夫を取り入れ、より親しみやすく魅力的な音楽体験を提供していく。

さらに、地方自治体や大学との連携を強化し、地域文化の活性化に貢献できるよう努める。筑波大学やつくば市との協力関係を継続しつつ、新たな共催・協賛の機会を模索し、持続可能なコンサート運営の体制を築いていく。加えて、学生主体の運営団体として、企画・運営のノウハウを次世代へ引き継ぎながら、より発展的な活動へとつなげていくことを目標とする。

文京ラグビースクール活動支援
～小学生へのラグビー普及活動の一環として～

【活動地域：東京都文京区】

附属高等学校　教諭　　山田　研也

1 事業の概要

文京区周辺の小中学生を対象に、2013年４月より開校した「文京ラグビースクール」の活動を、本学ラグビー部、附属高校ラグビー部およびその OB 会により支援する。東京都内でのグラウンド確保が難しい中、文京区内に広大な敷地を有する附属学校のグラウンド及び日本選手権準優勝の実績を誇る本学ラグビー部の人材を有効に活用し、この地区におけるラグビーの普及に貢献することを目的とする。

2 事業成果の概要

【活動支援体制】

運営：文京ラグビースクール事務局（理事会）
　　全１１名 - 理事長、副理事長２名、理事８名
指導：筑波大学附属高校 OB、小石川高校 OB、
　　東京大学 OB、日本 IBM OB、保護者他

【生徒在籍者数】

男子213名　女子22名
幼児33名　小学生187名　中学生15名

2024年度はコロナの影響もおおむねなくなり、100回を超える練習にのべ6000名超の生徒が参加した。

2023年３月には設立10年を迎え、フラッグシップとなるスクールとなるべく、新たな基本方針を策定した。概念図および基本方針を以下に示す。

同時に、スクール生、保護者、メディカルチームがそれぞれ「プレーヤーズ宣言」「保護者宣言」「メディカルシステム Bukyo’ s way」を発し、次の10年をよりよいものにしていくべく再スタートを切ったところである。

つくば生き物多様性フェスタの開催

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境系　教授　　上條　隆志

1 事業の概要

本プロジェクトは、つくば市の生物多様性戦略の策定とその活用に対して貢献するために実施した。開催を企画した「つくば生き物多様性フェスタ」は、つくば市民をはじめとする市民が生物多様性とその保全に関する理解を深めることを目的とする。具体的には、生物多様性に関するシンポジウム、つくばキャンパスを活用した身近な自然観察会、生物多様性保全を担う地元 NPO などの活動紹介から構成され、生物多様性やその保全活動に触れることが少なかった市民や子供も参加できるイベントとして開催した。

2 事業成果の概要

つくば生き物多様性フェスタ開催実行委員会(代表：上條隆志）を結成し、2024年11月30日に筑波大学でつくば生き物多様性フェスタを開催した。

1）つくば生き物多様性フェスタの参加団体

市民団体：つくば環境フォーラム、宍塚の自然と歴史の会、金田台の生態系を守る会、洞峰いきものSDGs の会、つくばフォレストクラブ

民間企業：株式会社奥村組、株式会社エーザイ、応用地質株式会社、戸田建設株式会社

財団法人等：公益財団法人森林文化協会、社会福祉法人つくばこどもの森保育園

研究所：国立環境研究所（つくば生き物緑地ネットワーク)、防災科学技術研究所、筑波大学

つくば市：つくば市生活環境部環境保全課

参加者数：約 100 名（関係者含め約 150 名）

2）つくば生き物多様性フェスタのプログラム

10:00-14:00　各団体のブース展示　総合研究棟 A

12:00-13:30　学内のミニ観察会

身近な雑草観察（筑波大　上條隆志）

昆虫観察（筑波大　横井智之）

14:00-15:30　シンポジウム　2H 棟2H101 教室

つくば市の生き物の魅力（筑波大　上條隆志）

身近な緑の役割（防災科学技術研　横山仁）

市民団体の活動紹介

16:00-17:00

市民団体との意見交換会（非公開）

3 地方自治体等との連携

本プロジェクトは、つくば市生活環境部環境保全課と連携して開催した。2024年度は、生物多様性つくば戦略の策定最終年度であり、生物多様性つくば戦略策定懇話会においても、重要なイベントとして、紹介された。また、2025年４月に公開された生物多様性つくば戦略自体にも本イベントの継続開催について言及がなされている。

ポスター（左）と開催の様子（右）

4 今後の展望

2025年度に本学社会貢献事業として第２回フェスタを継続開催する。本イベントの効果は大きく、市民団体同士・企業・財団法人等・つくば市・研究機関のネットワークが大きく進んだ。つくば市では、現在、生物多様性の保全を持続的に行うための実行力ある組織づくりを目指し、つくば市生物多様性センターの設立を検討開始している。本イベントおよび関連活動を継続することで、今の流れを大いに推進したい。

「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの継続的発展 2024

【活動地域：茨城県取手市】

生命環境系　助教　　丸尾　文昭

1 事業の概要

「いもりの里」では、関東平野の典型的な荒廃した谷津田・里山（取手市の耕作放棄地）を舞台に、地域住民と行政、学術サイドが協働して農村・都市一体型の維持管理ネットワークの構築に成功し、イモリ（絶滅が心配される水生動物）も棲める上質の自然環境を復元しながら、生命環境教育・農業体験・地域産業振興活動などの総合プログラムを実践している。本事業では「いもりの里」（地域の宝 / サンクチュアリ）をモデル拠点として活用・維持しながら周辺地域への拡充計画策定や周辺小学校での科学体験学習を支援する。

2 事業成果の概要

これまでの活動を通じ、地域住民サイドからは「いもりの里」の継続活用と維持継承を望む声が、行政サイドからは類似の事業展開を探る声が強いことが分かった。そこで「いもりの里」をモデル拠点として本格的に活用・維持しながら、科学学習支援や周辺地域への拡充計画策定支援·提言を継続的に実践している。

田植え・稲刈り・収穫祭等のイベントや生命環境関連の総合学習プログラムを、いもりの里協議会が中心となって、行政や地域住民などの協力も得ながら、年間９回開催した。

3 地方自治体等との連携

取手市役所まちづくり振興部を中心に「いもりの里」の候補地選定時以来１８年にわたり支援をいただいている。取手市から地元（いもりの里協議会）への公募補助金が継続的に採択されているほか、イベント運営スタッフへの市役所職員の方々の参加、有害外来生物（アライグマ）の駆除など、地域住民との３者間で連携した円滑な協力体制が確立している。

4 今後の展望

小学校児童を中心に家庭でのイモリ幼生飼育体験プログラムも１０年来に渡り提供しており、卵から成体イモリまで立派に育て上げて、いもりの里に放流するまでになっている。放流したイモリが「いもりの里」で成長している様子もたびたび確認されていたが、2022年以降、成体メスが受精卵を産卵することが繰返し確認できるようになった。今後はイモリネットワーク・ジュニアとして拡充し、「いもりの里」を生命環境教育の拠点としてもさらに発展させていく。また、世界で唯一のアカハライモリ・ストックセンターとしての役割（Nature Protocols 6:593-599, 600-608, 2011ほかに記載）も益々重要になってくると思われる。イモリ野外生態観察場で実施してきた追跡調査の知見を生かし、繁殖環境の整備にも力を入れている。

5 その他

ポートフォリオはイモリネットワーク (Japan Newt Research Community) の Web ページに随時掲載　http://imori-net.org/

表 . 令和６年度　いもりの里年間行事

開催日程	内容	参加人数
4/21（日）	取手いもりの里　谷津田・里山体験 草もち作り、春の花・いもり観察	24名
5/12（日）	取手いもりの里　谷津田・里山体験 どろんこ田んぼ運動会、田んぼの生き物観察	荒天中止
5/26（日）	取手いもりの里　谷津田・里山体験 田植え、田んぼの生き物観察	26名
6/16（日）	取手いもりの里　生き物観察会 土壌生物観察、いもり観察	13名
7/14（日）	取手いもりの里　星空の下の科学教室（日没後実施） 講演会、灯火観察　＊雨天のため講演会のみ屋内実施	34名
9/15（日）	取手いもりの里　谷津田・里山体験 稲刈り、いもり観察	23名
10/20（日）	取手いもりの里　谷津田・里山体験 収穫祭（主催：貝塚・上高井地区桑村環境活用推進協議会）	34名
11/17（日）	取手いもりの里　谷津田・里山体験 秋のデイキャンプ	21名
12/15（日）	取手いもりの里　谷津田・里山体験 クリスマスリースつくり	16名
2/16（日）	イモリ学習会（筑波大学） 再生の不思議、イモリの卵や幼生観察、イモリ幼生の飼育法	41名
3/16（日）	取手いもりの里　谷津田・里山体験 春のデイキャンプ	雨天中止

図 . イモリの野外生態の話を熱心に聞く参加者

地元に生育する希少種を救え（長野県南牧村）

【活動地域：長野県南佐久郡南牧村野辺山】

生命環境系技術室（山岳科学センター八ヶ岳演習林）　技術専門職員　　井波　明宏

1 事業の内容

筑波大学山岳科学センター八ヶ岳演習林のある南牧村で、「ネイチャーポジティブ」に向けた社会貢献として活動をする。

野辺山高原には、絶滅危惧種のタルマイスゲ（Carex buxbaumii Wahlenb.）が自生している（図６）。ある地元の有識者等によると、かつては、この野辺山周辺にある湿地の数か所に希少種のタルマイスゲが見られたようだが、近年の確認は、私有地にある湿地の一角のみに生育がみられる。この湿地には、希少な植物や水生昆虫等も生息している。その貴重な生息域（図１）が、残念ながら埋め立てられることになり、地元の希少植物を保全しているボランティア団体による移植保全作業が進められている。山岳科学センター八ヶ岳演習林は、この活動に協力し、この地の自生のタルマイスゲが絶滅しないように増殖を試みるとともに、自生地に生息する水生昆虫等の代替生息地となるようなビオトープ池を本学の野辺山の敷地内に設ける。

図１：埋め立てられることが決まった湿地

2 事業の成果

自生地の埋立て前の2024年６月初旬に、タルマイスゲ、ミズチドリ、サクラソウの希少植物を域外移植することが出来た（図３）。移植先は村の公共の場である矢出川公園である。地元のボランティア団体（のべやま山野草プロジェクト）が主体となって、南牧村の協力及び令和６年度長野県の地域発元気づくり支援金事業の補助助成を受けて行った活動で、本センターも地元の大学施設として移植当初から関わり、移植法等（図２）の相談に応じ、作業にも協力した。

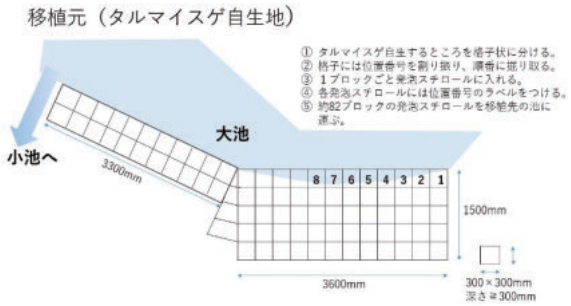


図２：ボランティア団体に提案した移植法の図

2024年６月下旬には野辺山にある山岳科学センター八ヶ岳演習林内の敷地内にビオトープ池の設置を完了した（図４、６×８m、水深≦70㎝、規模）。自生地より一部の地表植生（ミズゴケ類）を剥ぎ、池にいるヤゴ類（未同定）、ミズカマキリ等の水生昆虫を捕獲し、ビオトープ池にもってきた（自生地の土地所有者の許可済）。また、以前からトロ舟の鉢を使って育ててきた自生地の実生のタルマイスゲ苗も池に移植した。

図３：移植先の矢出川公園に域外移植されたタルマイスゲ

3 地方自治体との連携

タルマイスゲは、南牧村に残る貴重な植物として、一部には、その存在は知られてはいたが、その保全にまでは積極的ではなかったように思われる。今回、ボラティア団体（のべやま山野草プロジェクト）の松橋代表と上村氏の両名が、地元の南牧村、南牧村教育委員会との橋渡しを上手く行って頂いたことで、連携が出来た。また、南牧村の村長をはじめ、村議会委員、隣県の山梨県のボランティア団体にも理解と協力を得たとの話である。さらに元気づくり支援金助成のために長野県佐久地域振興局にもお世話になっている。もちろん、自生地での保全が一番であるが、埋め立て前に自生地からのタルマイスゲを移植することについて土地所有者の理解なしには、先にも進まなかった。

図４：ビオトープ池の設置の様子（上から順に２枚組）

4 今後の展望

今のところ、タルマイスゲの域外移植は成功して、移植先の矢出川公園で順調に生育している。しかし、今後のリスク分散として、専門である植物園等に株分けを行って、種の保全も検討しなければならない。さらに野辺山に残ったタルマイスゲの遺伝子レベルでの解析も、今後の保全策には役立つと考える。大学敷地内でのタルマイスゲの増殖にも努める。大学に設置したビオトープ池には、導入以外の生き物が棲み始め（図５）たり、徘徊し始めたり、生息種等の調査も必要である。例えば、標高 1,300m の自生地で、希少種であるゲンゴウロウの目撃事例もあったので、このビオトープ池の利用があると面白いかもしれない。希少種を世代に引き繋ぐ活動も必要である。

図５：2025年春、ビオトープ池にヤマアカガエルの卵

図６：自生地にあったタルマイスゲ

『つくばキッズメディカルユニバーシティ 2024』～少年期の子ども対象の医療現場体験ツアー～

【活動地域：茨城県つくば市】

附属病院　病院講師　　五味　聖吾

1 事業の概要

知的好奇心の旺盛な幼少期の学童にとって医学・医療の世界は非常に関心度の高い魅力的な分野だが、残念ながらその関心と理解を深める実体験可能な場が本邦では少ない。県内の小学生を対象に最先端の医学・医療が実体験可能な本企画を開催し多種多様な子供達の興味や能力の醸成と子供達の将来の職業選択の裾野が広がるきっかけとしたい。また医学的リテラシーの涵養活動を通じて地域社会に医学・医療ひいては本学の魅力を提示する。

2 事業成果の概要

小学生の夏休み期間である７月30日に開催した。「救急医療セミナー」では人体モデルを使っての心肺蘇生法の講義を行った。講師の指導の元、児童が心臓マッサージと AED を組み合わせた心肺蘇生を実践した他、ドクターヘリが使うヘリポートの見学も行われた。

昼は、実際に入院されている患者さん向けの病院食を食べながら「食育セミナー」を行った。

午後は、看護師による注射・血圧についての説明や車いす・ストレッチャーの使い方などの「看護セミナー」を行った。

「内科セミナー」では、小児集中治療センター医師が、医療ドラマの話題を交えながらトリアージやバイタルサインについての講義を行い、「外科セミナー」では、外科医師が、持針器（針を持つための道具）の持ち方等について説明したほか、人工皮膚を使っての縫合にもチャレンジしてもらった。

参加児童たちは、医療現場で活躍するスタッフから直接レクチャーを受け、積極的にスタッフに質問するなどして、より医療への興味関心を深めていた。

3 地方自治体等との連携

開催に先立ち、日立市、高萩市、北茨城市の三市の教育委員会を通じて、各小学校に開催及び参加募集についての連絡を行った。

4 今後の展望

来年度以降は児童の募集地域をさらに拡大し、同時に筑波大学附属の小学校などにも門戸を広げていきたい。セミナー内容についてもさらなる充足を図っていきたい。

不登校児のためのオルタナティブ体育活動事業「ココ / カラ基地プロジェクト 2.0」

【活動地域：茨城県土浦市】

体育系　准教授　　澤江　幸則

1 事業の概要

不登校児は年々増加しており、体育を受けていないもしくは体育に良いイメージのない子どもたちにとって、スポーツを通じたさまざまな感覚に触れる経験をする場を設けるために教員と学生で地域の通信高校に通う生徒を対象に、体育・スポーツ活動を実施した。

2 事業成果の概要

「もっとらくにスポーツをしたい、自分のペースで運動したい、体育授業のイメージをぶっこわしたい、笑顔でいっぱいの時間にしたい」というモットーで「らくスポ」という体育活動を月に１回行った。４月は卓球とＧボール、５月はシッティングバレーとモルック、６月はチーム対抗ミニゲーム、７月はバスケットボール、９月はチーム対抗リレー、10月は卓球とＧボール（改良版）、11月はグラウンドゴルフ、12月はＴボールとフライングディスク、１月は筑波山登山、２月はバレーとピックルボール、３月はボッチャと卓球を行った。本年は、活動場所には来ているが、見学をしている生徒に焦点を当て、見学をしている生徒が活動に参加できるような仕組みや工夫を意図的に取り組んだ。

写真１：活動の様子（左：Ｇボール、右：ピックルボール）

１）地域との交流

地域の方と触れ合うこと、地域の方の目に留まることで通信高校や不登校のイメージを良くしたい！という思いから、体育館などの施設利用だけではなく11月や12月の活動では亀城公園、１月の活動では筑波山など、一般の方も活動している地域資源も活用した。

実際に11月のグラウンドゴルフでは、お散歩にきていた地域の方が活動の場に入り、生徒にコツを教えてくださるなど一緒にゴルフを楽しんでいる姿がみられた。

写真２：地域の方と交流している場面（左）、筑波山登山（右）

２）生徒主体のプログラム作成

“スポーツをする”を楽しむために行っているらくスポだが、２月のバレーとピックルボールの活動では、生徒が主体的に活動に参加するために、生徒が企画に携わるプログラムを行った。結果、スポーツを楽しむだけではなく生徒たちで“スポーツをつくる”経験から、体育嫌いやスポーツに対する苦手意識があった生徒からも新しいスポーツの価値に気づけた、スポーツをより楽しむことができたという声が挙がった。

3 地方自治体等との連携

土浦市の教育委員会の方がらくスポの活動に興味を示してくださった。現場調査のために活動場所に足を運んでいただき、見学とお話する機会を設けていただいた。

また本年は、ココ / カラ基地プロジェクトのメンバーが不登校・多様な学びネットワーク茨城主催の不登校・多様な学びつながる“縁”日にボランティアとして参加し、地域の方との交流をした。

4 今後の展望

今後は、今年度の活動の効果を検証するために、見学者が活動に参加できるための工夫を意図的にプログラムに取り組み、不登校（だった / の）子どもたちが楽しくスポーツができるためのパッケージを作成して、新しい価値形成のための体育活動場所を広げていく予定である。

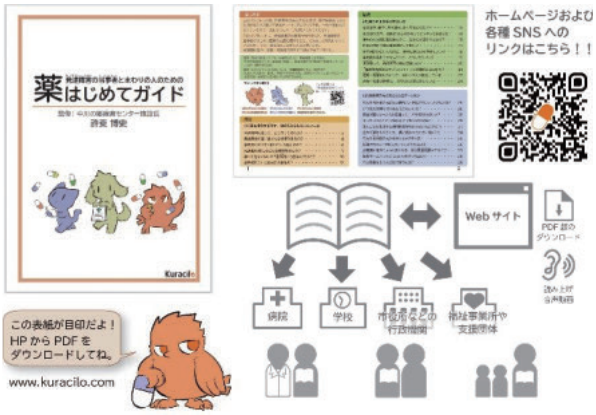
発達障害医療に関する当事者向けパンフレット「発達障害の薬はじめてガイド」

【活動地域：茨城県つくば市】

人間系　助教　　仲田　真理子

1 事業の内容

我々は、2021年11月に神経発達症（いわゆる発達障害のこと。以下、パンフレットの名称に合わせて本稿では発達障害と呼称する）当事者向けの通院・服薬に関する理解促進パンフレット「発達障害の当事者とまわりの人のための薬はじめてガイド」を発行した（下図）。



本パンフレットは、医療や薬についての科学的に正しい情報を知ってもらうことに加え、通院・服薬に対する不安の軽減や、医療者との円滑なコミュニケーションをサポートすることも目指して制作された。当事者向けの情報提供も少しずつ盛んになってきた昨今ではあるものの、2021年当時は、発達障害を含めて精神に疾患や障害のある人に向けた信頼できる情報源は少なく、医療に関する情報は特に少なかった。科学的根拠のない「治療法」や当事者を侮蔑するようなニュアンスを含んだ「解説」が跋扈するなか、発達障害で通院や服薬をする本人の心理的安全性に配慮し、科学的に信頼できる情報源が必要であると考えて、パンフレットの制作を行い、無料で配布する活動を続けてきた。

「薬はじめてガイド」プロジェクトのもう1つの目的は、情報格差の解消である。2021年当時から多くの都道府県が「発達障害のパンフレット」を制作・配布はしていたものの、生活上の注意や、家庭・職場・学校での支援のやり方について家族や支援者向けに書かれたものがほとんどであり、当事者が、自分がこれから飲む、あるいは飲んでいる薬について無料で情報を手に入れることは難しい状況であった。我々は、SNS上で積極的に広報活動を行うと同時に、学会等への出展を通じて、知名度を高め、Webサイト（www.kuracilo.com）に設置した「申し込みフォーム」で、誰でも、どこからでも（※発送は日本国内に限る）発送依頼を受け、1冊から無料で発送してきた。同時に読み上げが可能なアクセシブル版PDFもサイト上で配布し、紙の冊子でなくても良い人や、音声での読み上げが必要な人も自分の端末で簡単に読めるようにした。

2023年には、千葉県君津市の親の会「君津市手をつなぐ育成会」と協力して「君津市版」を制作、および共同でプロジェクトの運営に当たっている富山大学の瀬戸川剛助教が、富山県発達障害者支援センター「ほっぷ」と連携して「富山県版」を制作・発行してきた。2024年度末の時点で、これらの地域版も含めた発行部数は累計64,400部であり、3年半かけて情報インフラとして多くの人に知られるようになってきた。

活動の中で、大学や市役所、ドラッグストア等、公共の場所にパンフレットを設置してもらう機会がある。公共の場所への設置は、情報検索のためのリテラシーやモチベーションの高くない人にも情報を得る機会を提供できるという意味で、非常に重要な取り組みである。しかし、パンフレットがなくなったとき多忙な担当者に追加の請求をしてもらうことは難しく、一部の役所などから追加の請求をもらったことはあるものの、恒常的にパンフレットが設置されている状態を維持することに苦戦していた。そこで2024年度は、これまでと同様に広報活動やパンフレットの配布を行う傍ら、大学構内や市役所、病院等に設置したパンフレットの最後の1部を取った人に、ケースの最後に置いたシートに記載されているQRコードからパンフレットがなくなったことを報告してもらうシステムを構築し、つくば市、富山市において試験的な運用を行った。

2 事業の成果

2024年度は、全国版10000部（セルフメディケーション振興財団啓発事業等助成）、富山版2000部（齋藤茂昭記念財団2024年度助成）の増刷を行い、Webサイトのフォームからは156件の依頼を受け

た。第120回日本精神神経学会学術総会（2024年6月20日～22日、札幌）に書籍展示で出展した（下図）。

同学会への出展は今回が２回目であったが、720部のパンフレットを持参し、660部をその場で配布することができた。会場では多くの医療機関より発送依頼を受け、会期終了後に1810部を発送した。これは、１回目の出展の約３倍であり、プロジェクトの知名度の向上と同時に、共同意思決定（医療を受ける本人と医療者が共同で治療の方針などを決めること）に対する精神科領域の関心の高まりを感じた。

恒常設置システム構築のため、パンフレット立てから最後の一冊を取った人がパンフレットの払底を知らせてくれる仕組みがうまく作動するかどうかを試すため、筑波大学人間エリア支援室前・富山大学病院内・つくば市役所・富山県発達障害者支援センターにて実装実験を行った（下図は筑波大学）。

当該システムは、パンフレットケースにQRコードがついたカードを添付し、最後の１冊を取った人にQRコードのフォームから報告してもらう仕様であった。しかしながら全体として報告回数が少なく、フォーム経由での報告を受けてパンフレットを補填することに成功したのは、筑波大学のポイントのみであった。

特に富山大学病院廊下の設置ポイントでは、100部以上が取られたにもかかわらず１度も報告がなく、スマートフォンをその場で使用することを前提としたシステムは、病院等スマートフォンの利用が制限されたり、使いこなせる人が多数派ではない場所ではうまく働かない可能性が高いと考えられる。

3 地方自治体等との連携

つくば市役所２階の障害福祉課パンフレットコーナーにもパンフレットを設置させていただき、同様に実装実験を行った（下図）。

つくば市役所で顕著だったのは、最後の１冊がなかなか取られない、という現象であった。これはパンフレット上部に見えていた「お願いがある」という文言が不安感をあおり、パンフレットを取ることを躊躇させたと考えられる。

4 今後の展望

2024年度も、大学をはじめとする様々な助成を受け、１万部以上を発送・配布することができた。メディア掲載やSNSの大規模な拡散がほとんどなかった状態でも多くの個人や教育機関、医療機関等から発送依頼があったことは、本プロジェクトの活動が、発達障害医療に関する「情報インフラ」として定着してきたことの証左であるといえる。

来年度も、活動を継続し、更なる普及活動に努めるとともに、恒常設置システムについては、今年度比較的反応が良かった筑波大学内に限定して複数個所で実装実験を行い、成功した方法だけを学外で実験する方針に切り替える方針を検討している。

障害のある高校生に対する大学進学サポートプログラム

【活動地域：茨城県を中心に、東京都、神奈川県ほか全国から参加者を募る】

ヒューマンエンパワーメント推進局　助教　　長山　慎太郎

1 事業の概要

本事業は、大学進学を希望する障害のある高校生が対象の大学進学サポートプログラムを実施するものである。発達障害や精神障害が対象のプログラム（オンライン）と、障害種を問わず参加できるプログラム（対面）を１回ずつ実施する。プログラムでは模擬授業や障害学生メンターとの交流、受験時や進学時に必要な支援の説明等を行う。これまでの取り組みに加え、障害種を問わず参加可能なプログラムの一部をオンデマンド動画として全国の障害のある高校生、高校教職員、保護者、大学等教職員向けに配信し、より多くの障害のある生徒や関係者への情報提供を行う。

2 事業成果の概要

令和６年度１回目は、発達障害・精神障害のある高校生を対象としたオンライン開催（2024年８月25日）、２回目は障害種を問わず参加できる対面開催（2025年２月15日）とし、１回目のプログラムには高校生10名、保護者・同伴者９名が参加した。２回目のプログラムには、高校生７名（当日欠席１名）、保護者・同伴者９名が参加した。

模擬授業「大学における合理的配慮」の様子

参加者への事後アンケートからは肯定的な回答が得られている。例えば、「とてもわかりやすく参考になりました」、「大学生に相談できてよかった」といったコメントが寄せられ、プログラムの有用性が明確に示された。また、本事業は障害のある大学生にとっても、高校生に自身の経験を伝えることで大学生活を振り返る機会となり、相互的な学習の場として機能している。大学生メンターからも「大学生活について高校生と一緒に考えることができてよかった」、「自分の困りごととよく似ていた」といった声が寄せられ、メンターにとっても成長の機会となっていることが確認された。

3 地方自治体等との連携

つくば市および茨城県教育委員会と連携し、いずれもこれまでの実績をもとに、後援名義を受けている。

4 今後の展望

本事業はこれまで６年間継続し、障害のある高校生への支援を着実に発展させてきたが、これまで定員以上の申し込みがあった場合には先着順や抽選で参加者を決定せざるを得ず、支援対象を限定せざるを得ない状況が続いていた。令和７年度では、従来の対面およびオンラインプログラムに加え、新たにリーフレット配布や障害のある大学生による体験談の充実を図り、受講者の進学準備をより具体的に支援することを目指している。これにより、本事業はこれまで以上に広範な支援を提供しつつ、外部資金の獲得や全国規模のネットワーク構築の基盤としての役割を担うことが期待されている。

5 その他

昨年度の取り組みの成果を令和７年度の学術学会にてポスター発表する予定である。

糖尿病の口腔管理についての情報発信を目的とした教育啓発活動

【活動地域：茨城県他　日本全国】

医学医療系　助教　　工藤　理恵

1 事業の概要

歯周病は糖尿病の合併症の一つであるが、セルフケアで予防できる。しかし認知度は低く、患者、医療従事者への疾患教育も十分とは言い難い。また医療機関と歯科の連携もスムーズには行われていない。そこで本事業では、筑波大学を糖尿病の口腔管理教育の拠点として、医療従事者を対象に最新の糖尿病の口腔管理の情報発信を行うことを目的とした研修会を開催した。また口腔管理に関心を持つ医療従事者をつなげ、サポートネットワークを構築することで課題解決する道筋を作る。

2 事業成果の概要

2024年度は、前年度の研修会受講後アンケート結果を加味した内容にて研修会を（2024/9/22）実施した。受講後アンケートでは、「すごくわかりやすく親しみが感じられました」、「難しいと感じていた口腔チェックができるかもと思えました」といった感想が得られた。また糖尿病の口腔管理の実践状況について情報共有を希望する医療従事者同士が交流できる場を提供する目的として、サポートネットワークの立ち上げを行った。オンラインミーティングを行い、今後の計画として、医科歯科連携システムの導入を検討中の施設に向けて、国内で院内外の歯科と医科歯科連携のシステムを構築した施設の医療従事者から、システムの構築に向けた活動や実践状況の実際に関する情報提供のための活動を進めていくことについて話し合った。

この他、本事業の広報活動のためのポスターを作成し、全国の医療施設に配布した。

3 地方自治体等との連携

本事業は、茨城県歯科衛生士会と連携して実施した。サポートネットワークは、徳島大学 桑村由美先生、市立貝塚病院 仲上静香様、協同にじクリニック 赤嶺勝様より支援を得て行った。

4 今後の展望

今後はサポートネットワークで得たアイディアをもとに、医科歯科連携システムの導入を検討中の施設に向けて情報提供を行い、糖尿病の口腔管理支援の普及を目指す。現在、サポートネットワークのメンバーは５名であり決して多いとは言えないため、より多くの方に知ってもらえるよう、さらなる広報活動を行っていく。また茨城県歯科衛生士会と連携する中で、糖尿病患者の口腔管理に関する医科歯科連携における問題として、医療施設だけでなく歯科側が抱える課題を明らかにしてアプローチをしていく必要性が見えてきた。このため歯科医院での糖尿病の医科歯科連携に向けた課題を明らかにし医科歯科連携の実現の一助としたい。

医療的ケア児の災害対策への支援

【活動地域：茨城県つくば市】

医学医療系　准教授　　宮園　弥生

1 事業の概要

わが国では数年ごとに大規模な災害にみまわれている。そのような中、人工呼吸器や酸素などの医療的ケアを要するこども達（以下、医療的ケア児）は災害弱者の中でも最も配慮を要する存在といえる。茨城県内の調査において、医療的ケア児への災害対策は自助・共助・公助のいずれも進んでいない状況にある。このため医療的ケア児をサポートする職種や所属の枠を超えて支援の対策を考えることを目的に、研修会と訓練を企画・実行した。

2 事業成果の概要

1）医療的ケア児の災害時地域連携訓練

目的：医療的ケア児を対象とした災害時の避難、情報連携、搬送、医療機関受入の訓練を行う。

参加者：災害時小児周産期リエゾン（筑波大学小児科医師）、災害時小児呼吸器地域ネットワーク（県立こども病院医師）、医療的ケア児および家族会（かけはしねっと）、多機能事業所（どんぐりの家）、受入病院（筑波記念病院）、医療的ケア児支援センター、つくば市職員、県医師会医師、つくば市警察等

内容：医療的ケア児が多機能事業所に通所中に震度６の地震と停電が発生したと想定し、訓練を計画した。停電対応中に体調不良者が発生して事業者・保護者→担当医→小児呼吸器ネットワーク→災害時小児周産期リエゾンへの情報連携を経て受入医療機関選定と搬送、搬送先医療機関での受入の訓練を行うというシナリオのもと、事前に研修会を兼ねた打ち合わせを複数回行い、2025年２月16日に訓練本番を行った。

写真１）　多機能事業所の発災前打ち合わせ

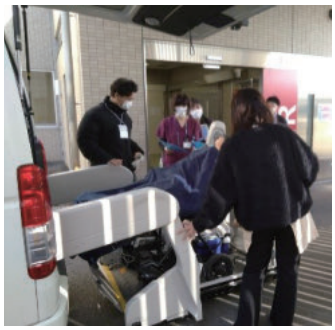


写真２・３）　リエゾンとの情報連携・受入病院への搬送

写真４・５）　受入れ病院救護室への収容と患者情報収集

2）茨城県災害時小児周産期リエゾン技能維持訓練

災害時に小児周産期領域において災害医療コーディネーターを補助する役割を担う茨城県内の小児周産期リエゾン30名を対象に、2025年２月23日に茨城県との共催でオンライン技能維持訓練を開催し、能登半島地震で支援リエゾンとして活動した名古屋市立大学の今井一徳講師に医療的ケア児に対する災害支援の実際について講演頂いた。

3 地方自治体等との連携

災害時地域連携訓練では茨城県医療的ケア児支援センターやつくば市、つくば市警察から有志の参加を頂いた。また、茨城県災害時小児周産期リエゾン技能維持研修は、茨城県の災害担当部署である保健政策課と協同して開催した。

4 今後の展望

今回の訓練を元に、実際の災害時に医療的ケア児に対してより実践的な支援を行えるよう、関係者との連携を強めていきたい。

筑波大学 社会貢献プロジェクト 2024−25

発　行　月　令和7年7月
発　行　元　筑波大学総務部総務課
〒305-8577
茨城県つくば市天王台1-1-1
E-mail　chiiki@un.tsukuba.ac.jp
URL：https://scpj.tsukuba.ac.jp/
印　　刷　いばらき印刷株式会社

筑波大学

University of Tsukuba